

2025年(R7年)



No. 396

ひと は っ し ん

だいじ ささきそら
(題字: 佐々木碧空)



(ホムパージアドレス) <http://hitoha-fukushi.com> (メールアドレス) honbu@hitoha-fukushi.com

社会福祉法人 ひと は 福 社 会

〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

今年もあっという間に半年が過ぎ、ついこの間新年度がスタートしたばかりと
思っていたのに、もう7月!?と月日が経つ早さにびっくりするところですが、皆さん
はいかがででしょうか。

さて、就労センターあっぷでは、今年度よりアグリサポートひととはの中に新しい
グループができ、その名を「ちいきおこし協力隊」としました。このグループは、地域に
出て地域の方々と協働のうで活動を展開していくグループです。田辺農園さん
での梨の袋掛けや選果作業、クリーンカルチャーさんでのねぎの定植作業など。これ
こそ福祉でできる地域づくりと思い、グループ名をそのようにさせていただきました。
一緒に働くきうらからも「いろいろなところで働くのが楽しい」であったり「農園
の職員さんと話をしたり一緒に働くのが楽しい」という言葉も聞かれます。

「ねぎの定植」について、田坂さんに自分たちの作業はちゃんとできているかを
聞かせていただこうと、30分程度話をさせていただく機会がありました。その
中で「最初は怪我をしたりはしないか、ちゃんと植えてもらえるだろうか」といった
不安もあったが、そのようなこともなく、しっかり植えてもらうことができるとも助かってい
る。今後他の作業も任せてみたいと考えている」という言葉をいただきました。

作業や活動を通じて、ひととはのことや障がいのある人たちの事を知ってもらい、
じわりじわりですがひととはの理念に沿って一歩ずつ活動していきたいと思えます。

ちなみにあっぷで定植させていただいている青ねぎは「あおいちゃん」という
商品として広島県内外で販売されているとの事です。

(就労センターあっぷ 城崎 高治)

「ひびきあっている」

SAYANさんとのご縁は20年近く前から。

ささき亭のきうら達はすっかり打ち解け、時にSAYANさんに悩み事や将来の夢を熱く語って
います。井上隆裕さんは、音楽を聴きながら毎回寝ます(笑)そして、
あー楽しかったと起きます。金羽木さんは、SAYANさんが大好き!その
魅力にはまってからは、私に会うと『今度いつ来るん?』と必ずチェック!
速いリズムの音楽になると田丸さんは踊りたくてウズウズ。手を挙げて
右左フリフリ踊り始めます。こんな田丸さんを見たのは初めて!吉高
さんは、太鼓の音楽になるとニコニコ、ウキウキ。「太鼓たたいてね!」と
バチを渡されたとき、大きな音でリズムに合わせて何度もたたいて
います。

回を重ねるごとに、SAYANさんはこちらの雰囲気を知り、こちらでもSAYANさんの前では自由にや、ちゃっ
ていいんだと味をしめ...きうらの内側からあふれる自由なリズムと表現があふれている。

これぞ! ひびきあっている♪ (ひととは工房 増野 奈緒)

《空想民族音楽SAYAN(サヤン)》世界の民族楽器と肉声とで自作の音楽を演奏、私たちの奥深く眠る
原始の力と呼びさまし《祭》の空間にいざなう一方、《音》の持つ不思議な力を探求しています。
長年共に活動した全介助の妹を亡くしてから、彼女の面影を抱いて演奏交流を続けています。

向原中学校2年生 職場体験実習に来られました —3日間の実習を終えて—

体験先でひととは農園ができて
よかったです。3日間いろ
んな勉強ができて、将来このよ
うなことがあったら生かしてい
きたいです。(小野太雅)

明日からぼくはいないので、みなさん頑張って下さい。
(仕事を)教えてくれたのは谷本さんでした。(富永 終 吾)

利用者さんと一緒に仕事するのは大変なこともあるけど、
おしゃべりすることができてよかったです。(中本海来)



「サヤン(サヤン)さん」
(画: 高木 奈緒)

「みゆきちゃん」

いつの頃からか、菅田さんから「みゆきちゃん」と呼んでもらうようになりました。
「内窪さん」は言いにくく字も難しいようです。急に親近感が増しました。そして、坂井さん、向井大輔さんもそう呼んでくれます。

事務局で向井さんから「みゆきちゃんじゃ、どしたん？」と大きな声で声をかけられました。スタッフがくすくす笑って「そう呼ぶのはきょうだいくらいです」と言うと、向井さんが「きょうだいじゃ!!」と言いました。私はくすぐったく恥ずかしいのですが、こう呼んでくれることを楽しんでます。(共同ホーム 内窪美由紀)

「変化が」

は 昼食時、食堂での出来事。垣野内さん、以前は傍にやかんがあっても自分で湯呑にお茶を入れられることはほとんどなく、気づいた私がどうぞと言って注いでおりました。いつしか...ホームに入られた頃からかなと感じておりますが...自分でお茶を入れておられ、またある日にはやかんがテーブルになければ、他のテーブルに取りに行き、そして私の「こんにちわ」の声かけにも笑顔で応えてくださるよう。今日は自分のお茶と、そして中山さんの湯呑にもお茶を注いでおられました。私は少し離れた場所から、何気にふと見た光景でしたが気持ちほっこりし、一人で微笑みました。(事務局 築城 暁子)

「恋に落ちる瞬間」

さくらグループの造形活動で、トイレットペーパーの芯を使った弓矢を作りました。小学3年生のR君が弓矢を作っている途中「これ恋に落ちる瞬間じゃん!」と一言(♡こんなイメージ?)。この弓矢からそんなことをイメージするとは!!普段から自分の思ったことを率直に言う子どもたち。R君の感性と言葉で「きゃん」と感じた瞬間でした♡(くらむぼん 埴西花)

ひとは40周年を前に

ひとはが産声を上げたのは40年前、向原町戸島に一軒の小さな空き家を借りることになった時の事。文尚さんの志にバをうたれた満得寺の住職さんや、役場の職員さん達が手弁当で床の張替えや、内職の運搬などもしてくださり、おかげで一歩を踏み出すことができた。利用者の最初の一人は「わたしは向原で働きたいんじゃ」とバ待ちにしていた重廣さん。それに文尚さんと女性3人。仕事はマスキングテープの製造、重廣さんは製品を箱に詰めたり、20キロ位ある材料を足元をふらつかせながらも張り切って運んでいた姿を思い出します。しばらくして近くに住む同年代の3人が仲間に加わりぎやかになりましたが、ロッカーもテーブルもなく、段ボールで代用したり床に座り込んでお弁当を食べたり、食後は外に出てかけこ。必死で走る姿がおかしくておなかを抱えて笑ったものです。走るのが苦手な重廣さんはすぐ裏の家の前川のおばさんと何故か意気投合し縁側でお茶を頂いておしゃべりするのが日課になっていました。ひとはが現在の場所へ引越してもおばさんは会うたびに「重廣さんは元気にしとってんかねえ」とバにかけてくださいました。数えきれない沢山の人たちに助けられて今のひとはがあることを忘れてはいけないと思いました。(兼近 洋子)

(編集後記)

移民として カルフォルニアの大地に渡った祖父母は 20年後 日本に帰郷 田畑を買い家を建てた。アメリカ生まれの日系2世の父が、日本で 兵隊になると言い 帰国したと聞く。
アメリカから帰る時 荷物を運んだ 大きなトランクを 産院に置き、その上 文尚さんの 写真を置いている。100年近い時が 流れ、40年のひとはとも 7人があってゆく。(埴西 順子)